

MUSEUM

ミュージアム・アイズ

EYES

Mm
MEIJI UNIVERSITY
MUSEUM

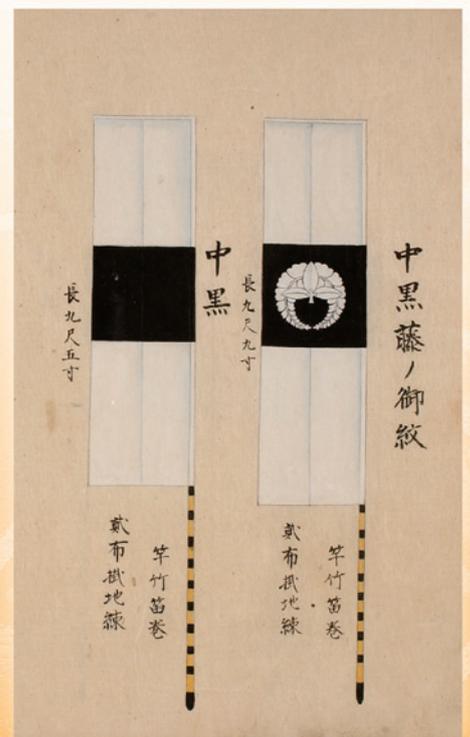
Vol. 60
2013



延岡藩内藤家文書交流事業 第2弾

幕長戦争における延岡藩の動向

中：「古御備」(内藤家文書)から / 左・右：「御軍列並御船印」(同)から



Contents

延岡藩内藤家文書
交流事業 第2弾

- 市民レクチャー—延岡転封前後の内藤藩財政の状況とその運営
- 2012年度実施イベント報告

- 博物館活動報告 / 図書室から
- 展示&リサーチ—いろはカルタは世相を映す鏡
- 学芸研究室から—玉里舟塚古墳の力士埴輪
- 収蔵室から—雨滝遺跡のミニチュア土器 / 鬼龍子と龍生九子—前場幸治コレクション—
- 南山大学協定通信
- 入館者の動き / 団体見学の記録 / M2カタログ
- 博物館友の会から—図書室管理員ボランティア募集

特集

幕長戦争における
延岡藩の動向

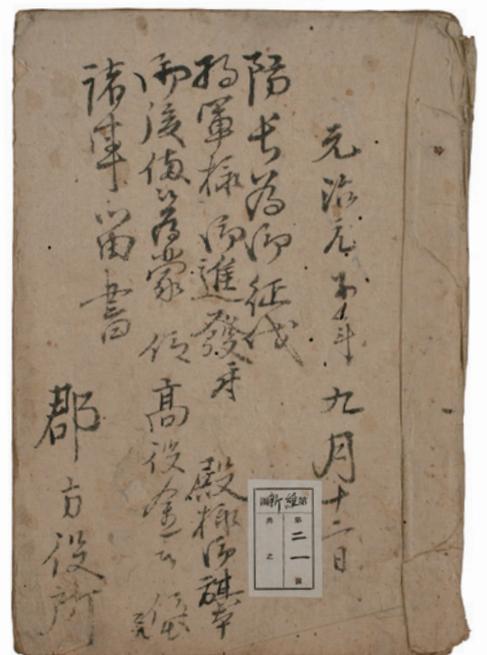
延岡市 内藤記念館 学芸員 大浪 和弥

平成24年度内藤家文書研究の促進事業の一環として、筆者は同文書群に含まれる幕長戦争関係史料の調査を実施した。これらを研究対象として取り上げた理由は2点ある。まず一つに、これまでの内藤家文書の研究状況を振り返った時に、幕末維新期を対象とした研究が殆どないということ、二つ目には近年の内藤家文書研究が文化的側面や領国統治に関しては多くの蓄積がある中で、武家政権の本質である「武」の側面については殆ど研究が進んでいないということである。係る研究状況を克服するため、延岡藩が動員された幕長戦争を調査対象とすることで、幕末における延岡藩の動向および軍事的側面が少なからず明らかになるものとする。言うまでもなく幕藩体制下では、その確立期に起きた天草・島原の乱以降200年以上も戦争がない、いわゆる「徳川の平和」が維持された時代であった。そのため、本稿が対象とする幕長戦争は、延岡藩に限らず諸藩が初めて経験する本格的な国内戦であり、それは同時に民衆が初めて直面した戦争でもあったと言えよう。

まず、幕長戦争に至るまでの幕末政治状況を概観する。尊攘派公卿と結びつき京都における政治運動を主導した長州藩は、文久3年(1863)8月18日に公武合体派の工作により御所警衛の任を解かれ京都から追放される(八月十八日の政変)。巻き返しを図る長州藩は、翌元治元年7月に軍勢を京都に進め、幕府軍と交戦するも敗走する(禁門の変)。これにより「朝敵」となった長州藩征討の勅命が7月24日に下り、幕府は全国諸藩を動員して長州藩の征討に乗り出す。その後、幕長戦争は2度にわたって展開される。第一次幕長戦争は、征討勅命が下った直後の元治元年8月より12月にかけておこなわれ、幕軍21藩15万人が長州藩を包囲したが、長州藩が恭順したため交戦することなく幕を下ろす。しかし、その後長州藩では倒幕派が政権を握ったため幕府は再び征討令を発して諸藩を動員、慶応2年(1866)6月から8月にかけて長州藩各地で局地的な戦闘が展開された。幕府軍が連敗する中、将軍・家茂の死去を契機に撤退令が出され、第二次幕長戦争は終結する。

幕長戦争は、幕府が威信をかけて仕掛けた戦争だったにもかかわらず、諸藩の出兵拒否や厭戦行為が続発したことで幕府の求心力の無さが露呈し、研究史上では幕府瓦解を決定付けた戦争と言われている。

では、この幕末政治史の重大事件において、延岡藩はどのような動向を見せたのであろうか。「防長為御征伐將軍様御進発ニ付殿様御旗本御後備被為蒙仰高役金被仰出并諸事留書」(第1部-29維新-18)等に拠りつつ、第一次幕長戦争における藩当局の初期対応を確認する。まず、元治元年8月21日に江戸城で藩主・政挙が「御旗本御後備」を言い渡される。「御旗本御後備」とは、軍勢の最後尾に配備され、将軍直属軍の後ろを固める部隊である。征長戦参加の報は急飛脚をもって9月12日に延岡にもたらされる。知らせを受けた藩当局の対応は素早い。ま



「防長為御征伐將軍様御進発ニ付殿様御旗本御後備被為蒙仰高役金被仰出并諸事留書」(内1-29-18)

ず、翌日には村々に対して高100石に付き70両の軍用金を課することが決定され、郡方を通じて大庄屋へ申し渡される。しかし、「類外之役高金」であるため、元治元年から向こう3ヶ年の割納とされ、元治元年10月までに30両、翌年と翌々年は3月と10月に10両ずつの割合で上納させる方針が採られた。この莫大な軍用金を負担させる際、百姓に対しては、「貳百年來之御治世」さらには「先祖代々枕を高くして起臥」してきた「御厚恩」に報いるためという論理が盛んに謳われている。藩当局が概算した軍用金の見込額は、郡方・町方からの上納金の他、本メ方や山林方などの藩庁各部署が捻出する金額を合わせ6万両に及んだ。このうち

の5万4000両は郡方と町方からの上納金であるため、実態としては戦費のほとんどが民衆に転嫁されたと言えよう。そして、軍用金徴発に加えて、人的動員も間を置かず始まっている。まず、延岡城下近郊の恒富村と伊福形村の郷足軽24名が、本営が置かれる大坂行きを命じられ、9月20日と21日に船で延岡を出発している。そして、23日には各村から徴発された小荷駄付の人足65名が東海湊から出航している。彼らは武器・弾薬・兵糧の運搬や陣地構築に従事させられる、いわゆる陣夫役である。

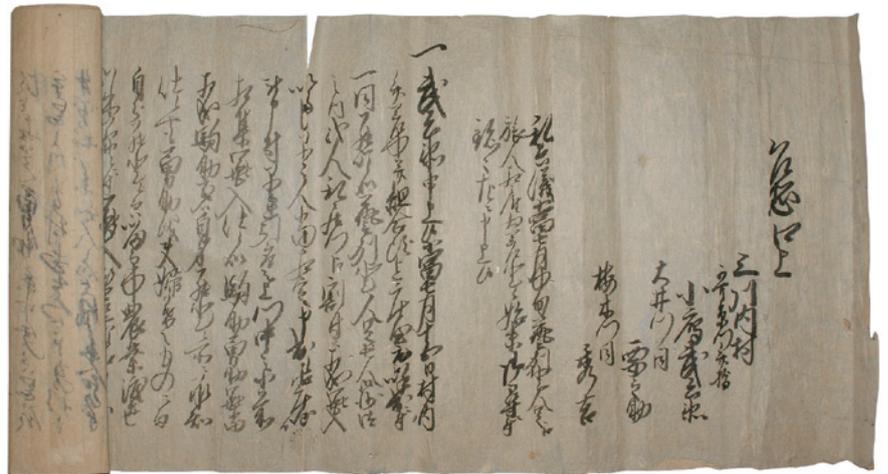
一方、藩正規軍の編制はどのような体制が採られたのであろうか。「御出陣御供御人数書」(第1部-29 維新-31)には、140名ほどの藩士が書き上げられ、半数以上が延岡より上坂する面々である。在江戸の藩主・政挙が率いて上坂する主力軍と京都で合流する手筈になっており、藩領から雇われた郷足軽などの非正規兵を合わせると第一次幕長戦争における延岡藩の軍勢は200名ほどだったと思われる。この数字には先述した陣夫役は当然含まれていない。村々からの動員実態は現段階では詳らかにし得ないが、非戦闘員たる陣夫役を合わせると総勢500名近い人数が従軍していた可能性がある。

第二次幕長戦争においても第一次同様、延岡藩は「御旗本御後備」を命じられ、藩主・政挙は慶応元年閏5月6日に軍勢を率いて江戸を発し、6月28日に着坂している。この時の軍勢の編制が同年7月に御軍備調方が作成した「御出陣御行列帳」(第1部-29 維新-58)により判明する。紙幅の都合上、一々は紹介できないが、先頭の大砲方から最後尾の鉄砲組までの各ユニット総勢300名以上で編制された軍勢が書き上げられ、行列を構成している。これが延岡藩の正式な軍事フォーメーションであろう。

実際に幕長両軍が交戦するのは1年後の慶応2年6月からであるが、幕軍劣勢の中、6月28日に延岡藩は、広島・長州藩境の芸州口の応援を命じられ、政挙は軍勢を率いて海路大坂から広島

へ向かい、8月21日に芸州口へ着陣している。しかし、8月16日に將軍・慶喜は自身の出陣を中止し、休戦交渉の使者として勝海舟を広島へと派遣している。つまり、政挙の芸州口着陣は、すでに戦闘が終息して休戦交渉がおこなわれている最中の出来事だったのである。応援を命じられてから戦地到着まで実に2ヶ月を要していることを考えれば、政挙の戦地入りは戦闘終息を待っていたかのようなタイミングであり、戦闘回避のための何かしらの延引策が講じられたものと思われる。延岡藩側の目論見通りかどうかは分からないが、延岡藩は戦闘に巻き込まれることなく、軍勢は9月28日に海路延岡へ帰藩を始める。この時の出兵体制は、「内藤政挙藩事録追加」(東京大学史料編纂所蔵家記)によると、侍分が244名、農兵・足軽等の非正規兵が318名で戦闘員は計562名、中間・陣夫役は912名となっている。実に戦闘員の倍近い数の非戦闘員が戦場に動員されたわけであるが、幕長戦争では、戦場に投げ出された諸藩の陣夫役による相次ぐ逃散や忌避行為が常態化し、少なからず戦況に影響を及ぼしたことが先学の研究により明らかにされている。延岡の三川内村では慶応2年9月に鬪取で選ばれた芸州行きの人足が、身代わりとして他領の旅人を差し出そうとした事件が数件露見している(第3部-14 地方-211「乍恐口上」他)。いずれも異口同音に、自分が村を留守にしては家族が難渋することを表向きの理由にしているが、内実としては組織的な夫役忌避行為と言えよう。

今年度の調査を通じて、内藤家文書が一譜代藩の幕末期の動向を俯瞰的かつ長期的に分析できる質量共に突出した史料群であることが再確認された。また軍事史料としても極めて利用価値が高いことも明らかとなった。本稿が幕末維新史料としての内藤家文書利用促進の一助になれば幸いである。



「乍恐口上」(内3-14-211)

延岡転封前後の 内藤藩財政の状況とその運営

森 朋久 (明治大学農学部兼任講師)

はじめに

内藤氏は延享4年(1747)に磐城平から日向国延岡へ転封させられるが、延岡転封以降の内藤氏は非常に財政運営で苦勞し、貧窮に喘いでいた藩として一般的に捉えられている。藩財政窮乏についてさらに突き詰めて考えていくなれば、地域的な状況として藩財政が窮乏しても仕方がない状況であったのか、それとも当時の藩首脳部をはじめとする役人達の財政運営のやり方が間違った方向へ向かったために招かれた状況であったのかを、幕藩体制国家の政治・経済・社会の流れに沿って明らかにする必要があると考えられる。以上の問題関心から、本稿では内藤氏転封が延岡藩財政にどのような影響を与えたのかについて、まだまだ中間報告の段階であるが小論を展開していきたい。

内藤藩財政の状況を明らかにする方法であるが、延岡転封以降の藩財政状況や地域の経済状況、高鍋藩、飢肥藩、佐土原藩、豊後諸藩など近隣諸藩や幕領との関係、さらに広げて九州諸藩や日田代官所との関係などを明らかにすることは当然必要であり、従来からこの視点で解明がなされている。これを踏まえてさらに検討を深めるためには、九州東南部に最初に譜代藩として進出した三浦明敬時代の財政状況、そして直前の藩主である牧野成央・貞通の財政状況を明らかにする必要があると考えられ



現在の岩熊井堰の様子(2012年)

る。そこで、三浦氏、牧野氏の藩財政状況を踏まえつつ、延岡転封以降の内藤藩財政の状況とその運営、運営のうえでの問題点を検討したい。

藩財政は、幕藩体制の社会基礎構造である石高制社会に規定され、農民が納めた米を中心とする年貢をもって運営され、江戸時代前期には農民も田では米の作付けを優先するが、江戸中期以降は、畑作物も換金商品作物として重視され、この収入が悪化した幕藩財政の補填の手段となる。この状況を踏まえて、今回は米以外の作物生産に対する領主掌握についてもふれたい。

1. 三浦氏の入部

まず三浦氏の延岡入部については、

九州東南部への初の譜代藩領の設定として注目されてきたが、江戸幕府の綱吉政権としては、九州南部で比較的生産性が高い宮崎郡や児湯郡を幕領化したことに意義があると考えられる。綱吉政権は元禄の地方直しという政策を実施し、扶持米、知行をふくめて稟米500俵～1000俵取りの旗本に領地を付与する(1000石以上の旗本は家光時代に実施)。旗本の新領地は幕領を割讓して付与されるのではないと思われるが、綱吉政権は地方直しの対象とならないはずの1000石以上の旗本(3000石程度の旗本)を畿内周辺や中部地域に転封し、その跡地で検地を行い500～1000石の旗本を創設した。その結果として幕府は、生産性の高い畿内や関東で幕

領を拡大していったと考えられている（深井雅海『綱吉と吉宗』）。また譜代藩および幕閣（外様を含めた）経験者の藩の改易、転封策を積極的に実施するが、これも幕領の拡大および綱吉政権を支える幕閣の優遇策であった。三浦明敬は、奏者番に初任されたあと若年寄を経て奏者番に再任され延岡転封を迎えた。綱吉政権は、大名・旗本を問わずに転封対象地に厳しい検地を行い、その結果として明らかになった打出（増加した石高）を幕府の管理下においており、三浦氏に対しても打出なしの2万3000石を与えるはずである。しかし三浦氏は打出高1万石近くを付与されており、三浦氏へのこの処遇は、綱吉政権においてはかなりの優遇ではないかと考えられる。綱吉政権は、宮崎郡を中心に設定された幕領の円滑な運営と他藩領との関係のために奏者番である三浦氏を配属したのではないかと考えられる。

2. 牧野氏の入部

牧野氏は、下総国関宿藩時代に大名となり、三河国吉田を経て延岡に入る。牧野関宿藩時代の開発は、利根川流域の低地開発、特に猿島台地の谷間の低地および沼の開発と検地による年貢地への繰り入れに特色がある。例えば利根川流域の下総国猿島郡百戸村（茨城県境町）では、寛文後期から享保初年まで高外地において新田開発が繰り返し行われる。この開発路線は、吉田時代を経て延岡時代に踏襲され、例えば享保期の岩熊井堰建設と出北用水の開削、新田開発に結果したと考えられる。また、猿島台地の茶畑に対する課税を行うなど、畑作・林野が中心である関宿藩での経験が、山地勝ちな延岡藩の地域支配に活かされたと考えられる。

牧野氏は、金融面では呉服問屋から金融資本に転化した三井家との関係を築き深化させるが、関宿藩時代からの畿内における飛地の存在が上方商人に対

する金融面での保証となり、双方の安定的な関係につながったと考えられる。

3. 延岡転封前後の藩財政状況と運営

牧野氏の常陸国笠間移封とともに、内藤氏が磐城平から延岡に入封する。平藩領は一円知行で、夏井川のほか中小河川に恵まれ、海岸部の低地、丘陵、山地と徐々に景観が変化する地形であり、藩全体を見渡すと石高制のもと生産性の高い土地であった。これに対して延岡藩領は、宮崎・延岡・高千穂とその周辺に藩領の散らばる遠隔地分散知行であり、海岸部に低地帯があるものの、山地が海岸部にせまるという土地条件であった。

遠隔地分散知行の欠点として、藩が抱える地域支配（地方・町方・山林とも）のための役人が自ずと一円知行に比べて数多く必要とされ、支配上の不効率が存在することがあげられる。藩領の土地条件は、磐城時代（米中心）と延岡時代（畑・山林資源中心）と大きく異なった。つまり、磐城時代の米中心経済から畑作物・山林資源中心の経済（殖産興業）への転換が必要であったが、内藤氏の場合はこの政策転換がスムーズに進まなかったといえる。

また金融経済面でいえば、磐城時代

（江戸経済圏、金経済圏）から延岡時代（上方経済圏、銀経済圏）への転換が容易に進まなかった。内藤氏は上方経済圏と初めて恒常的な関係を結んだため、資金力の豊かな蔵元、金融資本との関係がもてず、赤字藩財政補填のための借金を十分に行うことが困難であった。

さらに内藤氏は、宝暦・明和期において内藤拳母藩の財政顧問を藩主政陽の関係から登用した。後者の内藤氏は磐城泉藩から上野国安中藩を経て三河国拳母藩へ至るが、いずれも比較的土地の生産性に恵まれた。特に拳母藩は、米作中心で矢作川流域の生産性が高い地域を藩領としており、このような藩の財政顧問が土地条件の異なる延岡において十分に手腕を発揮できたとは考えられない。また殖産興業や領内商人との密接な関係も遅れた。

以上の検討から、延岡の実際の地理的な特色を十分に把握できず、典型的な石高制の論理に縛られた当時の財政運営の方向性が間違っていたことによって、延岡藩財政の窮乏が招かれたと考えられる。

（本稿は、2012年9月29日延岡市内藤記念館での講演内容を抄録したものである。参考文献は最小限に留めた。）



現在の出北用水の様子（2012年）

明治大学博物館では、江戸時代の譜代大名家史料として今後大きな研究成果が期待される旧延岡藩内藤家文書の研究活用の活性化事業を、5ヶ年の中期的計画として推進しています。それに並行して、学術資源としての有為性を一般にアピールするとともに、史料原所在地における歴史学習活動の活性化を趣旨とする交流事業を2011年度からの3ヶ年計画として実施しています。2012年度はその2ヶ年目でしたが、その事業について振り返ります。

作文コンテスト

昨年に引き続き、宮崎県教育庁・延岡市教育委員会のご協力を得て、地域の歴史をテーマとする作文を公募しました。5月1日から5月31日までの応募期間に届いた作品は90件。今年は小中高生それぞれ優秀賞1名・入選1名を選出いたしました。受賞の皆さんと作品のタイトルは下記一覧の通りです。授賞式は夏のオープンキャンパスに合わせ、8月2日(木)を予定していましたが、残念なことに台風接近のため搭乗予定の航空便が欠航。やむなく、11月10日(土)に延期となりました。日程は短縮されましたが、受賞者の皆さんは大学施設の見学、内藤家文書観覧の後、授賞式にて風間信隆館長より表彰状を授与され、山の上ホテルで会食、翌日は都内各所を見学の後、帰途に就かれました。

この作文コンテストは、宮崎県ゆかりの学術資源所蔵を縁に、新しい世代が先人の生き様に学ぶ歴史学習の振興に資することを趣旨とし、2013年度も実施されます。

受賞者・受賞作品一覧

高校生の部【宮崎県全県在学生対象】

優秀賞 太陽の国の女性校長

宮崎県立宮崎南高等学校2年 東 愛里さん(宮崎市在住)

入賞 これからの伝統芸能

宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校4年 丸山優花さん(五ヶ瀬町在学・門川町出身)

中学生の部【延岡市在学生対象】

優秀賞 監物や喜多右衛門に教えられたこと

延岡市立恒富中学校2年 菊池 恭さん(延岡市在住)

入賞 新ばんば踊りに込める思い

延岡市立恒富中学校3年 甲斐京之介さん(延岡市在住)

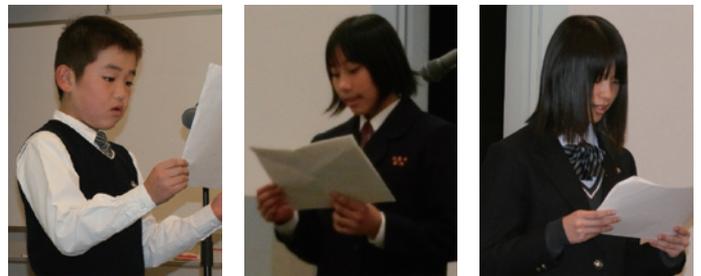
小学生の部【延岡市在学生対象】

優秀賞 延岡今山大師祭

私立尚学館小学校4年 新田庸理さん(延岡市在住)

入賞 方財島

延岡市立方財小学校5年 高田凜太さん(延岡市在住)



公開講座の開催

内藤家文書の研究成果を素材とする講演会を地元延岡及び東京にて合計3回開催しました。

明治大学博物館・友の会合同歴史講演会

テーマ 譜代大名内藤家と能楽—能楽史料としての内藤家文書— 参加者数 42名

講師: 増田 豪(延岡市内藤記念館主任学芸員) / 日時: 2012年7月31日 / 会場: 明治大学博物館教室

明治大学博物館・延岡市教育委員会主催歴史講演会 会場: 延岡市内藤記念館

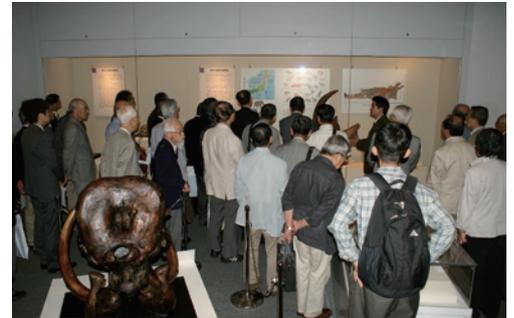
第1回 2012年9月29日(土) 増田 豪(延岡市内藤記念館主任学芸員) 譜代大名内藤家と能楽
参加者数 61名 森 朋久(明治大学農学部兼任講師) 延岡転封前後の内藤藩財政の状況とその運営

第2回 2013年2月23日(土) 大浪和弥(延岡市内藤記念館学芸員) 幕長戦争における延岡藩の動向
参加者数 72名 外山 徹(明治大学博物館学芸員) 内藤藩藩祖家長公と子息元長公の霊神奉祭

2012年度 博物館特別展

氷河時代のヒト・環境・文化 THE ICE AGE WORLD

2012年度博物館特別展は、2012年10月12日～12月12日にかけて特別展示室で開催されました。日本列島全域にまたがる考古学の成果をもとに、約4万年前にさかのぼる日本列島人類文化の登場と展開をテーマとしました。全国30ヶ所の博物館・研究機関から最古の石器資料を集めました。このテーマ自体は、一般に広くなじみが深いとは決まっていけません。しかしながら、いつ日本列島にヒトが住み始めたのか、最初のヒトは何をしていたのか、という課題とその解決への取り組みは、6万～7万年前以降にアフリカからはじまるとされる「現代人の拡散」という世界的な視野から見たより大きなパズルを解く、重要な一つのピースと位置づけることができます。こうした問題意識による展示を企画し、市民に公開することは、他の公立博物館等では難しい場合もありますので、大学博物館ならではの役割です。やや難解な展示におつきあい頂いた4000人弱の来館者の方々には、お礼を申し上げるとともに、次回の特別展にもご期待いただければ幸いです。なお、本特別展図録(124頁)は博物館にて販売中です。



公開特別講義 伝統的工芸品の経営とマーケティング Vol. 7

有田焼商品開発のターニングポイントを開催しました。

— 産地卸売商社から見た市場動向の変化 —

講師 金子真爾氏 (有限会社金照堂代表取締役社長・本学文卒)

商学部と連携し「市場調査論B」「商品学B」の拡大版として、2012年12月5日(水)に他専攻科・学部の院生・学生や一般の方々にも門戸を開いた特別講義を開催しました。今年、産地卸売商社の経営という視点から産地をとりまく情勢について解説いただきました。和食器は洋食器と違って素材の種類も器の種類も多様なことから小規模メーカーが分立しているため、消費者の要望に応えるためどこに何をどう作らせたらいいかの確に判断できる産地卸売商社の機能が不可欠であるということでした。近年の市場動向としては、消費者の趣向の多様化により、ビッグヒットがなく売れたとしても小さな単位で、商品の寿命も短くなっている点が指摘されました。そして、有田では2000年代に入る頃から、「匠の蔵」シリーズなど複数の商社やメーカーが提携した企画商品が出始めたという動向が紹介されました。今後の課題として、実用品としてはすでに行き渡ったジャンルなだけに、今までにはなかった価値を作り出すこと、それにより今までとは違った市場を作り出すことの必要性が述べられました。

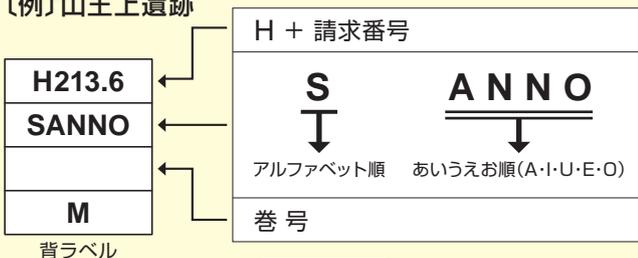


※この講義の抄録は『明治大学博物館研究報告』18号(2013年3月31日刊行予定)に収録されます。

図書室から

図書室からでは、博物館併設の図書室に関することをご紹介します。今回は、発掘調査報告書(背ラベルの見方)についてとりあげます。

〔例〕山王上遺跡



並び方の例

山王上遺跡(SANNO)→汐留遺跡(SIODO)→巣鴨(SUGAM)→瀬田遺跡(SETA)→染井(SOMEI)のような順番で並んでいます。

博物館図書室で一番所蔵数が多い図書は、発掘調査報告書です。OPACの配架場所表記では、「発掘」になっています。2012年12月末現在で、約49,700冊が配架されています。

発掘調査報告書は、背ラベルの1段目に記入されている、「H+請求記号」の順で並んでいます。その次に、背ラベルの2段目に記入されている遺跡名のアルファベット順に並んでいるのですが、ここでワンポイント!この遺跡名は、1文字目がアルファベット順、その後はあいうえお順で並んでいます。つまり、都道府県(請求記号)の中で、アルファベットで始まる50音順で並んでいることになります。

博物館図書室では、利用された資料をご自身で返却して頂くシステムを採用しています。正しい請求記号の場所への返却をお願い致します。時々、違う場所に入っているものがありますが、そういったものを見つけた際には、こっそり元の正しい場所に入れていただけたら幸いです。

夏休みいろはカルタまつり

— 時田昌瑞ことわざコレクションから —

いろはカルタは世相を映す鏡

外山 徹 (商品・刑事部門学芸員)

ことわざ・いろはカルタ研究者である時田昌瑞氏から受贈した資料の整理を進める中、伝統的なことわざカルタが受け継がれる一方、そのプロセスにおいては使用目的に応じてさまざまに姿を変える動向が見て取れた。そして、カルタは、単に遊びの道具であるばかりではなく、選択された情報を集積し、出し入れをするための一種のメディアとしても進化していったということを理解した。いろは順に京を加えて48通りのことわざで構成されたいろはカルタの特徴は、字句を記した字札とその内容を図像として表現した絵札の組み合わせで構成されている点にある。特に図像表現はその時代の雰囲気の色濃く反映しており、そこからは日本の近代化の歩みを照射することができるのである。カルタを通して日本近代の社会、経済、生活文化の移り変わりを振り返ることはできないだろうか、というのが2012年夏に実施されたこの展覧会企画の着想であった。

1. 教材への志向

江戸後期に成立したことわざいろはカルタは、明治期に入り、パッケージに「教育」



教育と付された明治期の江戸系いろはカルタ



展示風景 (教育への志向)

の文字が目立つようになる。しかし、その内容は子どもに対しては難解と思われるものも含む伝統的な江戸系いろはカルタがほぼ踏襲されており、文意はさておき文字を覚えるという点で利用が図られたようだ。時期を経るにしたがい、教訓的なことわざ自体を教育の素材とするような動きが出てくる。修身教育は明治13年(1880)の改正教育令で主要科目として位置付けられるが、大正から昭和戦前にかけて、カルタは明らかに思想教育の教材としての性格を帯びてゆく。そのため、道徳心や生活習慣の涵養を志向して伝統的なことわざが入れ替えられてゆく傾向が出てくる。この動向の行き着く先は、ことわざよりもさらに直接的な表現としての「標語」の多用ということになる。

大正頃までは字句に徳目が並んだ教育

カルタであるが、昭和に入るとは日の丸や旭日旗による国体観念の注入と、軍服姿の頻出による兵役義務へのサブリミナル効果が顕著になってくる。「新案物識りかるた」(昭和5年・1930)は、現在の小学校高学年から中学生頃の少年に期待された知識で構成されている。昭和7年(1932)の上海事変に際し、3人の工兵が破壊筒もろとも爆死した事件は、「肉弾三勇士」として軍国美談化され書籍や映画などあらゆるメディアで喧伝されブームの様相を呈したが、カルタという日常的に接する玩具においてもその風潮が色濃く反映された。

2. メディアとしてのカルタ

カルタが単に札を取り合う遊戯ではな

く、独自のメディア（伝達媒体）として見なされるようになるのもこの頃である。時田氏の分類する伝統的な江戸系・上方系とその混淆形に対し、新案系と分類されるカルタが登場する時期、字句はことわざに限定されることなく、文芸、音楽、地理、歴史などを題材に多様な変化を遂げてゆくことになる。例えば、「趣味教育 俳句いろはかるた」（大正10年・1921）や「啄木カルタ」がその典型例であるが、これらは、あきらかに字句と図像を眺めて楽しむものである。なお、雑誌『少女の友』附録である「啄木カルタ」（昭和戦前）は、字札は石川啄木の詩で、絵札は詩の内容とは関連しない中原淳一の少女画である。

文字と図像の組み合わせによるメディアとしては、新聞や画報がその中心と言えるが、個々に字句と図像をピックアップして見せるカルタという形式が一定の存在感を保持したことを指摘できる。

3. 敗戦後の復興からいろはカルタの全盛へ

敗戦を境にいろはカルタの様相も一変する。当然ながら軍国色は一掃されるが、道徳教育への志向性はむしろ強まった感もある。貧困から来る少年犯罪の激増期でもあり、カルタの内容も賭博や闇市での徘徊を悪とするなど時代を反映する。新仮名づかいへの対応を謳った商品が目立ち、国語教育の一翼も担った。この時代のカルタは明治期へ戻ったように小型化したものが目立ち、物資不足の時代を実感させる。紙箱には入っているものも自分で切り離して使用するものがあるが、絵札と字札をそれぞれ1枚ものの刷り物としたものも数多い。実際、自分で切り離して作ったカルタで、大切に使い込まれ



昭和30年代の一枚刷りカルタ

たものが残っている。

昭和30年代は子どもの玩具としてのいろはカルタの最盛期と言える状況があった。この時代は、カルタ以外にもメンコ、双六、凧、など紙素材の玩具が中心で、プラスチックや金属は玩具を作る素材としてはまだ価格の低廉化にしばらく時間が必要であった。

この頃のいろはカルタはことわざカルタが継承されていたが、昭和の初めの頃から顕在化した江戸情緒の伝統柄からの脱却は顕著で、そのことが却って図柄にその時代の雰囲気の色濃く反映するという状況を作り出すことになる。子どもの衣装は洋装が中心だが、緋の着物も散見され、鉄鍋、キセル、菜切包丁やバーゲンセールなどが時代を感じさせる。また、カウボーイ姿や騎兵隊などアメリカ映画の影響、やがて、宇宙ロケットや火星人といった図柄も現れる。

4. 伝承玩具というジャンルへ収まる

時田氏はことわざカルタ衰退の理由として漫画アニメを題材としたカルタの登場を指摘している。昭和40年代に入る頃にはこうしたカルタが大量に出回るようになる。また、セイカノート、ショウワノートなど学用品を扱う会社や任天堂など大手の玩具メーカーの製品が多くを占めるようになり、それ以前の製造元表示もないよ

うな零細メーカーによる商品が淘汰されていった時代であった。大手メーカーによる市場の寡占状態はカルタからも見て取れる。

いろはカルタの需要が下げ止まったところに、時田氏は1990年代初頭の大人向けのいろはカルタのブームを指摘するが、確かに装丁も豪華ないろはカルタが登場する。武井武雄の復刻ものや安野光雅ら有名画家の手がける絵札など、これもまた札を取り合って遊ぶというよりは字句の図像表現の妙を鑑賞するための、形が変わった画集とでも言うべきものである。

江戸系のことわざいろはカルタはその後も根強く生き残り、いろはカルタ自体の退潮とともに伝統柄が復活して来る。いろはカルタは、昭和30年代にあったような汎用的な子どもの玩具としてではなく、江戸の文化を伝える教養玩具というジャンルを確立してそこに収まったとも言える。一方、丸囲いの頭文字を付した絵札と字札の組み合わせ、というカルタの基本的デザインはカード形式にとられず、表現方法として様々なところで目にすることができる。これについて、時田コレクションの実例を紹介するには紙幅が尽きた。カルタという表現形式がこのメディア疾風怒濤の時代においてどう進化・適応してゆくのか見守ってゆきたい。



展示風景（いろはカルタの全盛と退潮）

玉里舟塚古墳の力士埴輪

忽那 敬三 (考古部門学芸員)

1. これまでの認識

玉里舟塚古墳は、霞ヶ浦北岸にあたる茨城県小美玉市に所在する6世紀の前方後円墳である。1960年代に明治大学考古学研究室によって発掘調査され、石棺の外周に副葬品を納める櫛を設けた特殊な埋葬施設や数十体に及ぶ人物・形象埴輪群が検出され、茨城県南部を代表する後期古墳のひとつとして著名である。2008～2010年に明治大学博物館によって行われた埴輪の再整理作業の結果、高床式の家、横座り方式の乗馬を示す馬、武装表現のある下半身をもつ武人埴輪など、従来の認識よりもはるかに豊富な種類の人物埴輪群を擁していることがわかり、さらにおおよその配置場所などの比較から、継体天皇の墓と目される大阪府今城塚古墳と多くの共通性をもつことが明らかとなるなど、重要な成果が得られた。今回紹介する力士埴輪も、その再整理の過程で存在が確実に復元に至ったものである。

玉里舟塚古墳における力士埴輪の存

在は当初から明確であったわけではない。実際に1968・71年に発表された概報には力士埴輪の記述はみられない(大塚・小林1986・71)。力士埴輪について扱った論考でも玉里舟塚古墳の資料を取り上げたものは少なく、具体的な資料については明示していないものの青木豊氏が力士の存在について記述しているほか(青木1987)、駒宮史朗氏が指の表現がある下半身(写真1)について力士の可能性を指摘している程度である(駒宮2004)。青木氏が『力士の考古学』(2008)のなかで、前述の下半身と笄(こうがい)帽をかぶる人物埴輪の上半身(写真2)を力士としたことで、その存在がクローズアップされることになったが、力士埴輪としては、これまでほとんど認識されてこなかったといえよう。

2. 力士埴輪の“発見”

力士としての評価が難しい背景には、欠損部分が多く決め手に欠ける点があった。まず足(写真1)については、立脚形態を

示す台部に爪先に刻目表現のある両足下部がつき、左足のみ足首から腿までが残存する。左足は全面を灰色の顔料で塗り、高さの低い突帯で表現した脚結部分は赤色の顔料で彩る。ここで問題となるのは爪先の表現である。概報では刻み目が6あり、指とすると本数が多すぎため皮製靴の縫い目と推測しているが、だとすると爪先のみ刻み目が集中する点に疑問が残る。やはり指と考えるのが妥当といえ、実際に和歌山県井辺八幡山古墳、神奈川県登山1号墳など、裸足表現の例があることから、力士埴輪である蓋然性が高い。ただ、裸足の巫女埴輪の例もあることから、力士以外の可能性についても考慮しておく必要がある。

続いて上半身であるが(写真2)、腹から上が残存し、前方に突き出されていたと思われる左腕を欠く。右手は2008年の再整理で接合し、親指・人差し指・中指が残り掌を体側に向けていたことがわかった。顔面には彩色の痕跡がなく、耳は刺突に

よって開けた孔の周囲に断面三角形の不整な粘土帯を貼り付けて表現する。耳たぶにあたる位置に剥離痕があり、登山1号墳例、埼玉県酒巻14号墳例のように耳飾りをつけていたとみられる。頭頂部には円盤状の粘土板を載せ、その上に中ほどを凹ませた粘土棒をつけ、盾持人物埴輪などによく見られる笄帽のような形状を呈する。若松良一氏は、類似した頭部形状の酒巻14号墳例について、帽子ではなく結っ



写真1. 力士埴輪?の足
(茨城県立歴史館蔵)



写真2. 接合前の「笄帽をかぶる人物」
(茨城県立歴史館蔵)



写真3. 接合前の力士の腰
(明治大学博物館蔵)

た豎髻としている(若松2010)が、眉の上には明瞭に段が認められ、被り物であることは疑いなくと思われる。確かに、玉里舟塚古墳の他の人物埴輪の帽子は、表面を入念に調整して粘土紐の境目を消しているのに対し、本例は粘土板と粘土棒の境はナデ消さない。笄帽だとしても、盾持人物埴輪の笄帽などは異なる特殊なタイプのもを表現している可能性がある。

ただ、力士埴輪で最も多い頭部表現は粘土板を衝立のように頭頂部に貼り付けるいわゆる「扁平髻」(若松氏は仮面とする)であり、「笄帽」は、鉢巻と坊主(帽子も髻も表現しない)とともにかなり少数派の表現である。また、片手を上げるポーズが多いが大半は上に上げており、本例のように片手だけ前気味に突き出すものはほとんど例がない。こうした理由から、本例は力士のなかでもイレギュラーな要素が多く、これまで力士とする決め手を欠いていた。

力士の存在が確定したのは、2008年からの再整理により、まわしをしめた下半身(写真3)が発見されたことによる。腹の約1/3とまわしの全周、左足の足首上までを復元することができた。前後それぞれに別個の粘土棒に粘土板を貼り付けて股間のまわしを形成し、陰囊や陰茎の表現はない。また、足も含め、腹にも彩色が一切ない。尻の表現はほぼなく、一見するとどちらが前か判別しきれぬほどであり、時期

的に先行する茨城県三味塚古墳例とは表現が大きく異なっている。残念ながら、足に接合する台部は今のところ確認できていない。破片の形状から写真2の個体と接合することがほぼ確実であったため、玉里舟塚古墳における力士埴輪の存在が初めて確定したのである(忽那2010)。

3. 力士埴輪の復元

上半身と下半身の接合は2012年の夏から秋にかけて実施され、当初の予測通り、腹部において両者がピタリと接合した。石膏による復元部分の成形は博物館友の会ボランティアの近藤庄司氏、彩色は本学考古学専攻生の宮崎哲平氏によるものである。右足及び台部は玉里舟塚古墳から出土している他の武人埴輪を参考にしたもので、復元の結果高さ120.9cm、横幅35cmの堂々たる姿となった。台部が想定とはいえ、現状で全身が復元されている力士埴輪の中では、井辺八幡山古墳例と並び全国最大級である。先述のように、本例は力士埴輪のなかではかなりイレギュラーな存在ではあるが、全身が復元された数少ない貴重な例が加わったことになる。紙幅の関係で評価は別の機会に譲るが、島根県石屋古墳の例から人物埴輪出現期に既に力士埴輪が存在した可能性があることがわかり、力士埴輪が埴輪群像のなかで占める役割がこれまで認識されていた



写真5. 復元後の力士埴輪

よりも重要であったことがうかがえる。玉里舟塚古墳では写真1の個体も含め、表現パターンが異なる複数個体の力士埴輪が存在した可能性があり、力士埴輪そのものの実態を解き明かすうえで鍵となる可能性を秘めている。現在進行している整理作業の進捗により、新たな報告を行う予定である。

なお、復元にあたり茨城県立歴史館および同館首席研究員の小澤重雄氏には数々のご高配を賜りました。記して謝意を表します。

【参考文献】

- 青木 豊 1987「力士埴輪」『國學院大学考古学資料館紀要』3 國學院大学考古学資料館
- 青木 豊編 2010『力士の考古学』かみつけの里博物館
- 大塚初重・小林三郎 1968「舟塚古墳Ⅰ」『考古学集刊』4-1東京考古学会
- 大塚初重・小林三郎 1971「舟塚古墳Ⅱ」『考古学集刊』4-4東京考古学会
- 忽那敬三 2010『王の埴輪』明治大学博物館
- 駒宮史朗 2004「力士埴輪考」『幸魂』北武蔵古代文化研究会
- 鈴木 徹 1994「古墳時代の力士像と相撲考」『三河考古』7
- 若松良一 2010「鎮魂の芸能者—相撲人」『力士の考古学』前掲書

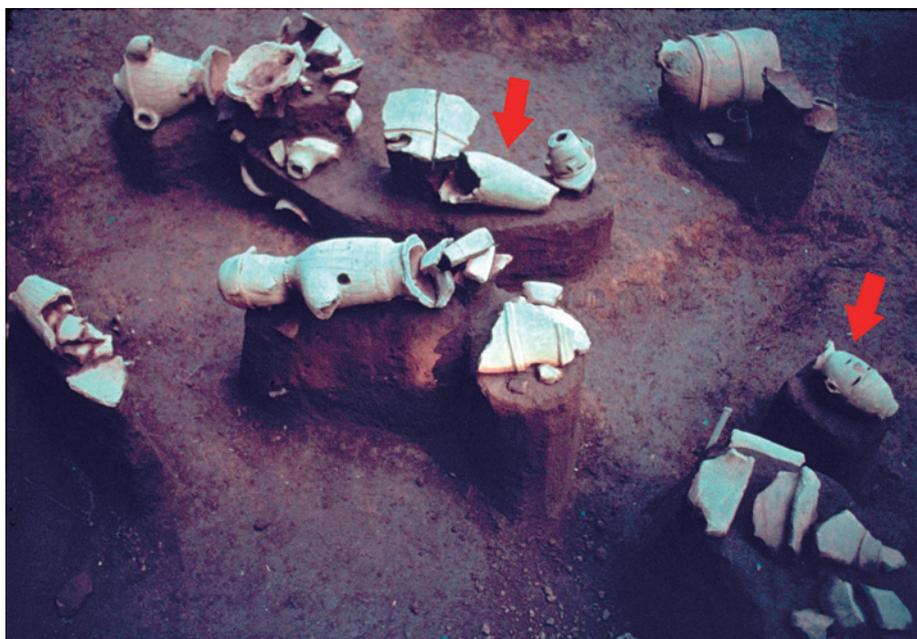


写真4. 人物埴輪の出土状況(西側造り出し、矢印が力士埴輪の一部)

雨滝遺跡のミニチュア土器



ミニチュア土器 (右:高さ5.7cm)



雨滝遺跡出土の注口土器 (左:高さ10.5cm) と
ミニチュアの注口土器 (右)



ミニチュアの注口土器

考古資料には、用途不明なものが数多くあります。明治大学博物館の収蔵資料にも、いまだ解明されていないものがあります。今回は、その中から岩手県にある雨滝遺跡のミニチュア土器について紹介します。

雨滝遺跡は岩手県二戸市に位置する縄文時代晩期の遺跡で、明治大学考古学研究室により1953(昭和28)・1958(昭和33)・1963(昭和38)年に発掘調査されました。この3度に渡る調査ではミニチュア土器の他に、土器・石器・土偶・岩版・土製品・骨角器・装身具などが出土しました。

ミニチュア土器は通常の土器よりも極端に小さな土器で、袖に入るくらい小さいことから袖珍土器しゅうちんとも呼ばれます。ミニチュア土器には、通常の土器の形や文様を模して精巧に作られたものと、これに対し整形が粗雑で文様がないものがあり、前者をミニチュア土器、後者を手捏ね土器てづくと呼び分けることもあります。縄文時代草創期からみられ、盛んになるのは中期以降で後・晩期になると深鉢や浅鉢などの鉢形土器・注口土器など各器種が一通り揃います。弥生時代以降にも同じようなものがみられますが、古墳時代には祭祀用の手捏ね土器が主体となります。出土状況から用途を推定するのは難しく、意義についてもいまだ明確にされていませんが、副葬品や子供の玩具の可能性が指摘されます。

当館に所蔵している雨滝遺跡のミニチュア土器の器種は、壺形土器と深鉢や浅鉢などの鉢形土器が多く、他には台付鉢形土器・皿形土器・注口土器があります。手捏ねのものや器種が不明のもの、破片も含めると約60点のミニチュア土器

を収蔵しています。当館では通常の注口土器を21点収蔵していますが、ミニチュアの注口土器は1点しかありません。子供の玩具や墓の副葬品という意見がありますが、雨滝遺跡のものをみると細部まで通常の土器のように忠実に作られています。子供の玩具と考えたときに、ミニチュア土器の作成には細かい作業が要求されることは想像が付き、破損も少ないため時間をかけ作ったものを子供に与えたとは考えにくいと思います。土器の器種をみても一通り揃い、土偶や石棒などの祭祀にかかわるものも出土しており、供献土器の可能性が高いとみられています。

ミニチュア土器はいまだその用途が不明で明確にされておらず想像の域を出ません。子供の玩具という意見も否定はできないと思います。小さいなかにも不思議な魅力を感じる資料といえます。

(古豊 裕次朗)

【参考文献】

- ・大塚初重 1963 「岩手県二戸郡雨滝遺跡」『日本考古学年報』16 日本考古学協会編纂
- ・芹沢長介 1953 「岩手県二戸郡雨滝遺跡」『日本考古学年報』6 日本考古学協会編纂
- ・芹沢長介 1958 「岩手県二戸郡雨滝遺跡」『日本考古学年報』11 日本考古学協会編纂
- ・芹沢長介 1960 『石器時代の日本』築地書館

鬼龍子と龍生九子 — 前場幸治コレクション —



第1図 湯島聖堂の鬼龍子（江戸時代 複製）



第2図 湯島聖堂の鬼龍子（江戸時代 複製）

鬼龍子とは、魔除け・火災除けとして屋根の降り棟に置かれる神獣のことで、中国の宋代から使われ始めたようで、元・明・清代を通して宮殿等の屋根を飾りました。紫禁城の太和殿には、一つの棟に11体もの鬼龍子が乗っています。11体すべて異なる神獣で麒麟・鳳凰・獅子・天馬等があります。朝鮮時代にも宮殿等に用いられましたが、その像様は中国と異なり、西遊記の登場人物が表現されました。一方、日本ではほとんど使われず、湯島聖堂（東京都文京区湯島）の鬼龍子のほか数例しか知られていません。湯島聖堂は孔子を祀る中国色の強い施設ですから、特に鬼龍子を飾ったのかもしれませんが。

先に紫禁城の11体の鬼龍子にふれましたが、少し詳しく述べていきたいと思えます。まず11体の種類ですが、①騎鳳仙人（鳳凰に乗った仙人）、②麒麟（龍に似たキリンビールのマークで見られる姿のもの）、③鳳凰、④獅子、⑤海馬、⑥天馬（ペガサス）、⑦狻猊（獅子に似る）、⑧押魚（魚に似る）、⑨獬豸（虎に似る）、⑩斗牛（龍に似るが蹄を持つ）、⑪行什（鎧を着た猿）

になります。日本では聞きなれない神獣が多く、またこれらが選ばれた理由もはっきりしていません。

しかし、この11体の鬼龍子は「龍生九子」と呼ばれる龍が生んだ九匹の子と関連があるようです。例えば、麒麟は蒲牢（龍に似る。吼えることを好む。）、鳳凰は嘲風（鳳凰に似る。遠くを望むことを好む。）、獅子は饕餮（飲食を好む、転じて魔を食らう。）、狻猊は狻猊（煙や火を好む。煙を吸い込んで、代わりに霧を吐く。）、押魚は蚣蝱（魚に似る。水を好む、転じて水の魔を飲み込む。）、獬豸は狻猊（虎に似る。罪人を裁くのを好む。公明正大の象徴。）、斗牛は睚眦（龍に似る。邪気から守る。）との対応が考えられます。

なお、「龍生九子」とは対応しませんが、騎鳳仙人は三蔵法師、行什は孫行者とされ、朝鮮の鬼龍子が西遊記の登場人物を表すのは、これと関連するのでしょうか。また、天馬・海馬は、皇帝の徳が天に通じ、大海にまで至ることを象徴しているとされます。

（明治大学博物館兼務職員：森本尚子・鈴木知子）



第3図 鬼龍子（海馬 宋代）



第4図 鬼龍子（獅子 明代）



第5図 鬼龍子（斗牛 明代）

「驚きの博物館コレクション展」を開催しました

南山大学人類学博物館との協定事業の一環として、名古屋市博物館において2013年2月2日から3月17日までの日程で明治大学博物館・南山大学人類学博物館・名古屋市博物館共同企画「驚きの博物館コレクション—時を超え世界を駆ける好奇心」を開催しました。当初は、協定事業に基づいて明治大学博物館のコレクションを南山大学で公開する予定でしたが、南山大学人類学博物館が移転工事中であったことから、約500㎡という大規模な特別展示室を持つ名古屋市博物館の協力で3館による共同企画展覧会というかたちで公開が実現することになりました。

展示では、3館に共通する収蔵資料である名古屋市西志賀貝塚の出土資料をプロローグとして、調査研究・寄贈・購入などさまざまな経緯で収集された3館の特色ある資料が所狭しと並べられ、博物館コレクションの奥深さを知ることができる内容になっています。明治大学博物館からは、4件の重要文化財等ギロチン、鉄の処女をはじめとする刑事・商品部門の資料約150点、考古資料約750点の計900点あまりが出展されました。この規模で当館の資料が外部で展示されるのは史上初めてのことです。



2月1日に開催された開幕式典では風間信隆館長が挨拶を行い、当館のなりたちと学術コレクションの意義、生涯学習への取り組みについて紹介しました。また、テープカットののちに内覧会が行われ、広い展示室が多くの見学者で埋まり関心の高さをうかがわせました。翌日午後には「明治大学考古学博物館のコレクション形成と西志賀貝塚の調査」と題して本学名誉教授の大塚初重氏により記念講演が行われ、考古学陳列館と博物館設立の経緯や、数々の重要な遺跡発掘のエピソードなど、90分に渡って貴重な戦後考古学史が語られました。詳しい開催報告は次号に掲載します。



開幕式典で挨拶する風間館長



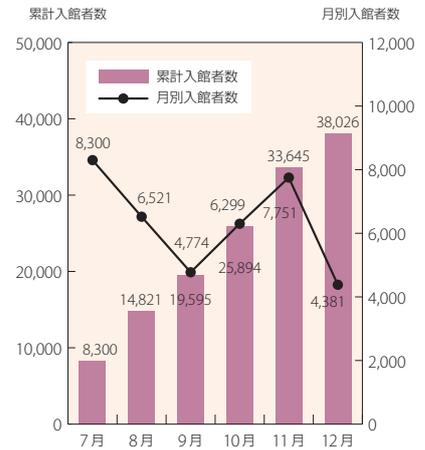
展示室内の様子

博物館入館者数の動き (2012年7月～12月:延べ人数)

2004年4月以降の
総入場者数累計 **555,799人**

1月～6月	延べ人数
図書室利用者	3,651
教室等利用者数	824

特別展来場者内訳			開催日数	来場者数
7/27～8/26	夏休み いろはカルタまつり — 一時田昌瑞ことわざコレクションから —	刑事部門収蔵品紹介 内藤家文書の魅力	24日間	2,391
9/1～9/19	新収蔵・収蔵資料展 2012		19日間	1,022
10/12～12/12	氷河時代のヒト・環境・文化 THE ICE AGE WORLD		31日間	3,647



団体見学の記録 2012年7月～12月

- 【一般】** 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 (45名) / 陸平をヨイシヨする会 (10名) / 明治大学昭和39年卒業クラス会 (11名) / 明治大学司法書士倶楽部 (10名) / 大成高等学校PTA (54名) / JASSくらぶ (21名) / 岩宿博物館 (37名) / 千葉県立長生高等学校PTA (45名) / 明治大学ロー・イン・ジャパンプログラム (16名) / 高崎高等学校PTA (40名) / 佐倉市民カレッジ (20名) / 江戸東京魔界さんぽ (19名) / 明神下診療所 (15名) / ティノス山登り部 (8名) / 神奈川県議会議員 高橋栄一郎後援会 (48名) / いわき市環境整備事業協同組合 (21名) / 埼玉県立本庄高等学校PTA (33名) / 明治大学長野県父母会 (20名) / 麻生区ヘルスメイト (12名) / 二水会 (10名) / 水戸歩く会 (26名) / 東友会 (30名) / 相模原市中央区明るい選挙推進協議会 (43名) / 大東文化大学秋期オープンカレッジ (10名) / 所沢高齢者大学 33期 (43名) / 豊岡プロバスクラブ (19名) / 浦和青年大学第19期校友会 (22名) / 曹洞宗埼玉第一宗務所 (26名) / 本所鉄交鋼友会 (7名) / 荒川区立第三日暮里小学校PTA (29名) / 館野地区公民館 (50名) / NPO 法人 東京シティガイドクラブ (12名) / グループタウンウォッチング (159名)
- 【小・中学校】** 関東学院中学校 2年生 (21名) / 明治大学附属中野中学校 1年生 (67名) / 東村山市立東村山第二中学校地理歴史研究部 (8名) / 西武台千葉中学校 第3学年 (20名) / 東久留米市立南中学校 (6名) / 明治学院中学校 (50名) / 埼玉県所沢市立所沢中学校 (3名) / 岡山県立倉敷天城中学校 (19名) / 桐朋女子中学校 第3学年 (47名) / 足立区立第十中学校 開かれた学校づくり協議会 (40名)
- 【高等学校】** 神奈川県立平塚中等教育学校 (6名) / 麹町学園女子高等学校 (14名) / 相洋高等学校 史跡研究部 (7名) / 千葉県立印旛明誠高等学校 2年生 (38名) / 東京都立一橋高等学校定時制 (4名) / 茨城県立佐和高等学校 (40名) / 新潟県立柏崎常盤高等学校 2年生 (40名)
- 【大学・大学院・専門学校】** 川口短期大学 (9名) / 神戸学院大学佐藤ゼミナール (19名) / 常磐大学人間科学部伊田ゼミナール (18名) / 明治大学情報コミュニケーション学部 タイ短期留学生 (25名) / 明治大学理工学部 (4名) / お茶の水女子大学文教育学部考古学通論2 (17名)

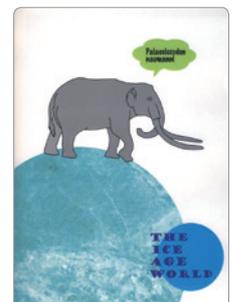
M2 カタログ

ケータイクリーナー & 新クリアファイル 販売中! 各200円

ミュージアムショップ「M2 (エムツー)」に新たに3つのグッズが仲間入りしました。ケータイクリーナーには、明治大学のシンボルカラーである紫紺を背景に、重要文化財に指定されている埼玉県砂川遺跡のナイフ型石器をデザインしました。石器ファンはもちろんのこと、展示をお楽しみいただいた皆様におすすめの逸品です。

クリアファイルには、我が国唯一の展示資料である「ニュルンベルクの鉄の処女」(複製)。国籍や世代を超えた人気の高さにお応えするとともに、建学の理念「権利自由」にもとづく人間尊重のメッセージを表現しました。

また、先の特別展「氷河時代のヒト・環境・文化」の関連グッズとして、氷河時代のナウマンゾウをあしらったクリアファイルも販売中です。いずれも透明の部分を活かしたデザインで中に入れた書類が判別しやすく、書類整理の効率アップにも最適。勉強や仕事のお供におすすめです。来館記念やお土産にいかがでしょうか。



博物館
友の会から

博物館友の会から
図書室管理員ボランティア募集

博物館図書室には主に発掘調査報告書、考古・刑事・商品部門に関する一般図書、各機関・博物館・市町村の刊行物、全国の博物館の図録が収蔵されており、学内外の多くの方にご利用いただいております。蔵書数は10万冊余り。蔵書の大半は発掘調査報告書で、多くの研究者に重宝されています。

図書室管理のボランティアは図書室利用者の入退室の受付と案内を担当しています。活動日・時間は図書室の開室している月曜日から土曜日の午前9時50分から午後4時30分までです。一日または午前担当(9時50分～13時まで)、午後担当(13時～16時30分)の半日交代も取り

入れておりますので、リバティアカデミー講座受講や博物館友の会分科会活動の合間にも参加できます。業務は極めて簡単、図書室管理員として受付をしながら図書閲覧は自由にできます。

博物館図書室には多数の学生、研究者が資料研究閲覧の為に訪れます。図書室管理員ボランティアはそれらの方々の手助けをして大学や博物館だけでなく学界にも貢献していると自負しています。初めてメンバーになれる方には実際に受付の体験をしていただく実習も用意しております。現在26名の図書室管理員が所属していますが、病気、所用等で人数は不足がちです。4月から手助けしていただける方が一名でも多く応募されるのを期待しております。(木戸 孝義)



博物館図書室

【明治大学博物館友の会 連絡先】

〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1
明治大学博物館 友の会宛
メールアドレス meihakutomonokai@yahoo.co.jp
※博物館に友の会の担当者は常駐しておりません。
連絡は必ずハガキまたはメールでお願いします。

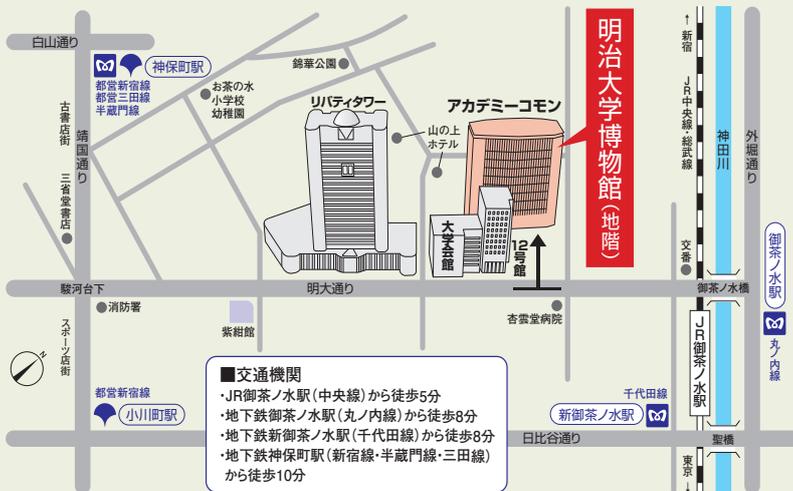
博物館案内

博物館案内

- ◆開館時間
10:00～17:00(入館16:30まで)
- ◆休館日
夏季休業日(8/10～8/16)
冬季休業日(12/26～1/7)
8月の土・日に臨時休館があります。
- ◆観覧料
常設展無料。
特別展は有料の場合があります。

図書室ご利用案内

- ◆開室時間
月～土 10:00～16:30
- ◆閉室日
日曜・祝日・大学が定める休日
※図書室はどなたでもご利用いただけます。
※蔵書は閲覧・コピーのみとなりますのでご了承ください。



■交通機関
・JR御茶ノ水駅(中央線)から徒歩5分
・地下鉄御茶ノ水駅(丸ノ内線)から徒歩8分
・地下鉄新御茶ノ水駅(千代田線)から徒歩8分
・地下鉄神保町駅(新宿線・半蔵門線・三田線)から徒歩10分

編集
後記

当館では今夏に内藤家文書の展示を企画しており、今号では5ページにわたり交流事業について特集を組みました。また【学芸研究室から】で取り上げました、茨城県玉里町塚古墳出土の力士埴輪を開催中の企画展にて当館初公開しています。力士埴輪以外にも商品・刑事・考古3部門で購入・寄贈された資料を中心に公開していますので、近くまでお越しの際は当館までお立ち寄りください。(古豊)